ヤクザと人夫出し

昭和四七年五月二八日、浴ケ崎のセンターで一人の男が労働者たちにとりかこまれていた。暴力団淡旅会系天梅会二代目組長、鈴木正九郎である。彼は鈴木建設興業というもっともらしい名前を使って、「人夫出し」を行なっていた。彼は又、四五年のセンター開設にともなって作られた人夫出しの団体「愛隣施設業者親睦会」の初代会長であり、この日までセンターのボスだった。

事件の二日前、彼のところに働きにいった若い労働者が、西大寺にいけといわれて、

「求人票に『市内』と書いてあったが、西大寺は奈良やないか」

というと、鈴木正九郎は、

「西大寺も奈良『市内』や、文句あるのか」

とひらきなおった。

浴ケ崎の求人票に「市内」と書いてあれば、確だって大阪市内と思うのが普通だ。

けれども、センターにくる「人夫出し」側方は、「市内」といっては関西一円につれていき、「雑役」といって、現場を見てから、あるいは、電車でいかされる時は、その途中で「トンコ」するのが、浴の労働者の最大の抵抗だったのを、この若い労働者たちは、オヤジに面と向って抗議したのだ。

鈴木正九郎もビックリしたようだ。彼はすぐさま土建屋のオヤジから暴力団の親分に変身し、

「文句のあるやつは残ってろ」

というや、子分どもをあつめ、逃げれぬようにしてから、又脅しにかかった。

若い労働者も文句はいって見たものの、オヤジのあまりの変身ぶりにビックリし、又、子分どもがエモノをもって集まったのを見て、なんの用意もなかったので、その場は一応ヤジのいう所に働きにいくことにした。

だが、センターの人夫出し親睦会のボスとして、ヤクザの親分として、面子を潰されたと考えた鈴木正九郎は、その日の夕方、子分たちをセンターに送り、側、飯場にきて文句をいった若い労働者を一人見つけて飯場につれこみ、リンチを加え、

「今日きた連中にいっとけ、全員頭をボウズにしてあやまりにこさせろ。さもなければ、一人一人捕まえて、リンチするぞ」

と脅し、次の日の朝も又一人捕まえようとして、多くの労働者の抵抗にあい失敗した。

こうして、三日目の五月二八日の朝をむかえ、ツルハシの柄や木刀を用意してセンターに殴り込んできた鈴木組に対し、労働者が反撃して組長をおさえ、あやまらせていたのだ。

鈴木正九郎もこの事件の十年前までは土方をしていた。その彼が人夫出しになったのは、十年程前、殺人事件を起して、暴力団淡熊会系天竜会の二代目をついでからという。彼は、その時に初代の親分と妻子縁組して、在日朝鮮人から日本人にかわったといわれている。

淡熊(だんくま)会というのは元々、土建系のヤクザで、大正時代には関西一の勢力をもっていた。初代の淡路屋熊次郎の名前から「淡熊会」とし、熊次郎の本名が銅伝佐兵衛というところから「分銅」を代紋にしている。センターにくる業者の中にもこのマークをつけた組があったがその関係は知らない。

この初代淡熊の舎弟に木屋市(野口栄次郎)という親分がいて、レンガ屋をしており、この親分が大林組の初代社長、大林芳五郎の協力者としてバックアップしたため、今日の大林組があると『大林芳五郎伝』にも書いている。

大林芳五郎も田舎から出てきて、丁稚奉公をしたりしながら独立して、「人夫出し」をするようになり、木屋市親分と組んだりして、だんだん大きくなり、今日の大林組をつくったのだ。

ヤクザと「人夫出し」は昔からつながっていたようだ。

人夫出しの発生

昔、土木工事はすべて農民の賦役奉仕や強制労働でまかなわれた。

江戸時代になると、徳川幕府は大名たちに多くの工事をやらせて、彼らの金を使わせ、徳川に反抗する資金をなくさせようとした。また、旗本たちにも、その石高に応じて中間たちを出させた。こんな工事は、大名が交代でやらされたから、中間たちを工事のない時も飯を食わ

せることはないとして、用のある時だけ雇う「日雇中間」が必要になってきた。大名行列や旗本の江戸城登城の際などの中間もほとんどこの「雇われ中間」だったらしい。

この「雇われ中間」の仕出し元が、人夫出し稼業の始まりといわれている。だが、雇われとはいえ、武士の所へ出入りするから、問題をおこしたら、場合によっては切腹、お家断絶にもなりかねない。だからこの「雇われ中間」は、すべて当時の人夫出し「口入れ屋」のオヤジのの信用と「責任」が大切だった。口入れ屋のオヤジは親(分)として子(分)の全責任をとるかわりに、子(分)は親(分)のいうことならたとえ火の中水の中でもとびこまなければならないというオキテを作った。ヤクザの「親分のいうことは、たとえ黒いものでも白いといわなければならない」というのも、ここから始まったといわれる。

仕事のない時は、親分の家でメシを食わせてもらう。ヒマだからバクチを打つ。親分もまた、子分を手元にひきとめておく手段として進んで賭場をひらく。そこへ夜の電気に群がるガのようにバクチ好きが集まる。また、彼らの雇われ先の大名屋敷は、町奉行の取り締り外で、半ば公然とバクチがやれた。こうして「口入れ屋」は自然とヤクザ的な人間の集まりとなった。この中で一番有名になったのが、山口組三代目も先祖と仰ぐ「幡随院長兵衛」だ。

人夫出しはこうして最初からヤクザとからまっている。

明治時代に入って、土木工事は江戸時代と比べものにならないほど増えた。明治三年から始まった鉄道工事、師団設置工事など。

ところが民間にはそんな工事を請け負える業者や技術者がいない。徳川時代も技術者はすべて幕府や大名の役人(武士)だった。そこで大量の「外人技術者」を雇い、労働者だけを調達する人夫出しが必要となる。一定の資金と信用さえあれば、誰でも「人夫出し」をやって大金持ちになれるというので、ありとあらゆる人間が人夫出しを目指した。

「土木請負業者においては、特殊な技術や機械器具類を使うことが少なく、人足を上手に使えれば、素人でも土木請負人に化けることが可能だったのである。土木機械といえば、ツルハシ、ショベル、モッコ、大がかりなもので手押しトロッコがせいぜいの時代には、旗上げは比較的簡単であった。ややのちの日清戦争頃のことであるが、ある藪医者が偶然のことから、長崎県三角の築港工事を請負うことになった。八方工面して保証金と当座

の勘定用の金だけをこしらえ、家の前には砂の入った米俵を積み上げて、いかにも資金が豊かそうに見せたのが当って大いに信用をつけ、大成功で数千円の儲けを得た。そしてこれをきっかけに次々と工事を入手して、ついには押しも押されもせぬ土木請負業者になってしまったという実話がある。」（「鉄道請負業史明治篇」より）

現在の鹿島大手も、竹中工務店をのぞいてほとんどすべて、鹿島も清水も大成も大林もこうして人夫出しから成り上ってきた。

また、「〇〇組」というのも、明治一〇年代に、それまで請負者個人の名前を使っていたものがだんだん規模が大きくなるとともに、火消しの「いろは組」にならって、団結の象徴として「〇〇組」とつけたものだという。

明治一七年の賭博犯処分規制の公布以後、最初は入礼の時の口開き、まとめ役の「請合屋」として介入したヤクザが、もっともうかる「人夫出し」も始めるようになって「〇〇組」を名乗り出すや、関係のないヤクザまで世間体から「〇〇組」を名乗るようになり、今では「〇〇組」「組員」といったらヤクザの代名詞となり、本家の土建屋大手はほとんど名前を変えていっている。ついに最近では、ヤクザの方も「〇〇組」から「〇〇会」「〇〇興業」とかいい出してゴマカそうとしているが。

周旋屋とタコ部屋

明治三〇年代に入ると、北海道で大規模な工事が続々と始まった。それまでも労働者不足は大きな問題で、農業には屯田兵を使い、土木工事には囚人を使っていた。先住民族のアイヌ（人間という意味）は、江戸時代からの日本人の略奪と迫害によって、少数となり、また労働者としても差別されていた。

そこで、各地から労働者を集めてくる人夫出しとして「周旋屋」が全国にできて、酒や女や甘い言葉で労働者をつって（これをタコつり、といった）、北海道に送りこんだ。労働者は現地について始めてダマされたことを知り、当然逃げようとする。飯場のオヤジは高い金（？）を払って「周旋屋」から「人夫を買った」のに、逃げられたら大損だとばかりに逃げられないようにする。さらに、当時の北海道の現場は、たいがい人のいない所だから、殺してもバレないと死ぬまでこき使う。

ここまで書けば、あとは言わずと知れた「タコ部屋」である。ところで、この当時は、人夫が逃げても周旋屋は責任をとらなくてもよかった。それを計算して、旭川のある業者は、労働者をわざとトンコさせて、すぐ又別

のタコ部屋に紹介して稼ぐ事を思いつき、うまく逃げてきた労働者に賞金を与え、年間最多逃亡者には、金時計まで与えた。これを、タコの糸が切れて飛んでいくのにたとえて「飛びっちょ」と呼んだ。

この「周旋屋」は今の人夫出し飯場と違って、野帳場の飯場へ労働者を六ケ月契約で送りこみ、賃金から手数料をもらうもので、送りこんでしまえば、あとはなんの責任もとらなかった。そのかわり、送りこむまでは何日でも労働者を寝泊りさせ、遊ばせた。ムロン、前借りとして飯場から別に金をとるのだが。このへんのことは、高田玉吉さんの「土工・玉吉」「タコ部屋一代」（二冊とも大平出版社発行）に詳しく書いてある。

これに対して、今の人夫出し飯場みたいなものは「雇人請宿」とか「人夫下宿」とかいった形で町の中にあった。労働者をめし付きで泊らせる「下宿屋」が、人夫出し親方もかねていて、毎朝、仕事の紹介をする。

江戸時代の「口入れ屋」のように「親分・子分」の関係によるドレイ的な人夫出しはなくなったが、それでも悪質な業者はいつでも存在する。

大阪では、「雇人請宿」という形の人夫出しは合法としながらも、悪質な業者が多いので、明治十六年に「雇人請宿取締規則」を作った。当時の梅田停車場（今の大阪駅）に、手配師がうろついて、田舎から出てきたばかりの人間を、甘いことばや酒、めしでつって、下宿屋に送りこみ、強制的に働かせ、ピンハネしていると当時の新聞に出ている。

明治二十一年には雇人口入業者の宿屋（下宿）営業を禁止している。それに対して「口入れ屋」は、共同出資して「下宿屋」を別に新しく作ったりしている。

駅を舞台とする悪質な手配師と人夫出し業者は、百年近くたった今もあい変わらず存在する。大阪駅や上野駅にいってみればすぐわかる。

こういった「下宿屋」は、戦後ほとんど姿を消したが、北九州市八幡区では今でも残っている。これについては「渡世」二十一号「仲仕特集」に報告がのっていた。

現代の人夫出し

「このたび新しく実施された職業安定法は、今まで日本にあった人夫供給業とか親分子分による口入れ稼業というものを根本から廃止して、封建制度が生んだもっとも非民主的な制度を改正し、労働者を勝手に売買取引することを日本からなくして、各人が立派な一人前の人間として働けるようにされたものである。」（GHQ、コレ

ット発言）

昭和二十二年十一月に公布された職安法によって、GHQは三ケ月以内に人夫出しを廃止せよと命令したが、人夫出しは名前をかえて抵抗した。

とび・土工はもちろん、大工、左官などもすべて下請が禁止されたため、人夫出しや親方連中は、○○会社○○班と名乗り、飯場頭は○○寮社宿舎管理人とか○○寮長とか名乗った。

また、労働組合には紹介権が与えられていたので、人夫出しの組がそのまま労働組合を名乗り、親分が組合委員長になって人夫出しをつづけるといったことさえあった。東京の芝浦自由労働組合とか東京港荷役労働組合といったのがそうである。

下からの、労働者の団結の力による解放でなく、上からの命令による解放はやはりこんなものだろう。

昭和二十四年六月に朝鮮戦争が始まると、アメリカは日本支配政策を一転させた。民主化政策をやめ、朝鮮への侵略基地化として、戦争協力、生産第一として労働者に弾圧を加え、資本家を優偶しだした。

こうした中で、人夫出しも事実上復活を認められ、昭和二十七年二月に破壊安定法施行規則が改悪されて、「人夫出し禁止」は骨抜きにされ、今日にいたっている。

このタイプを打っている内に、冒頭にでてきた鈴木組事件の判決がでた。大人の労働者が、鈴木正九郎に傷をつけたとして「傷害罪」として懲役六ケ月を求刑されていたのに対し、判決は懲役三ケ月執行猶予一年の有罪だった。正九郎がなぐりかかってきたのに抵抗したのが悪いらしい。そういうことは警察にまかせなさいということらしいが、釜ケ崎では、その警察がそもそも悪徳業者とグルになって労働者をいじめていることを、裁判所は知らたいのか、知っていても知らん顔をしているのだろう。でなければ、ほめられるはずこそすれ、罰っせられるはずないのだが。

一方の鈴木正九郎はというと、職安法違反と凶器準備集合とかで、懲役八ケ月執行猶予三年とかになったらしいが、今はどこにいるかわからないそうだ。

（ア）

× ×